

# ヒノキ実生コンテナ苗生産の手引き

ヒノキ苗は、スギ苗と同様に需要が高く、コンテナ苗の栽培も各地で盛んに行われています。育苗においては、スギ苗と共通している部分も多いですが、異なる部分もあります。このリーフレットでは、ヒノキ実生コンテナ苗を生産する際の注意点やポイントをまとめています。すでに公開している「スギ実生1年生コンテナ苗生産の手引き」と合わせてご覧ください。

## 種子の選別

コンテナに種子を1粒/孔直播することで、移植や間引きの手間がなくなります。この方法では、種子選別によって種子の発芽率を可能な限り高める必要がありますが、ヒノキでは、特に外観による選別が有効です。



① まずは篩で小さい種子を除きます。この例で使っている種子は特定母樹混合、篩の目合は2.00mmです。

② 次に、界面活性剤0.01%水溶液に数時間～半日ほど浸し、浮いた種子を除きます。普段は界面活性剤33%配合の食器洗い用洗剤の0.03%水溶液を使用しています。



③ ②までの手順を終えれば、残った種子のほとんどは良い種子ですが、最後に外観をチェックし、悪い種子を除きます。

④ うまく選別できた場合、90%以上の種子が発芽します。



良い種子



膨らみがあります。

悪い種子



薄っぺらく、透けてます。

⑤ 余ったり、選別で除かれた種子は育苗箱などにバラ蒔きしましょう。発芽した稚苗をコンテナに移植すれば苗になります。



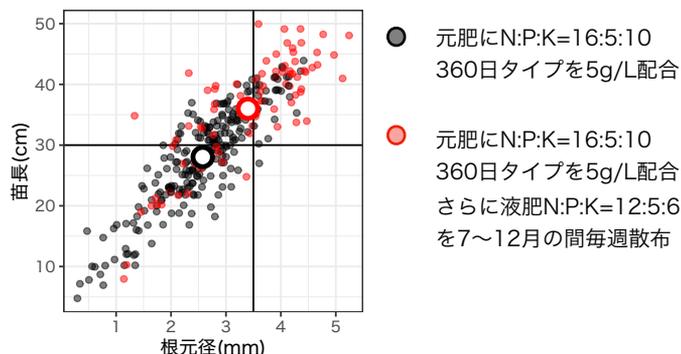
※選別の成否は、種子の系統や品質によって異なります。実際に使用する種子をよく観察することが重要です。

## 肥料の効果

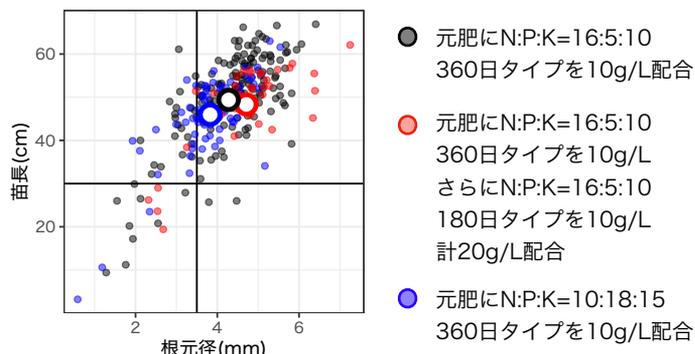
スギなどで過剰な施肥を行った場合、徒長の危険がありますが、ヒノキに追肥をした場合、H/D比は変わらず、成長を促進する効果がみられました(下図左)。また、元肥の種類や量によっても、成長量に違いがみられました(下図右)。これらの結果から、N:P:K=16:5:10-360日タイプを10g/L配合し、必要に応じて追肥することをお勧めします。

(H/D比…樹体の高さ÷太さ 低いほど好ましい)

2017年4月播種、翌年5月時点



2018年4月播種、翌年6月時点



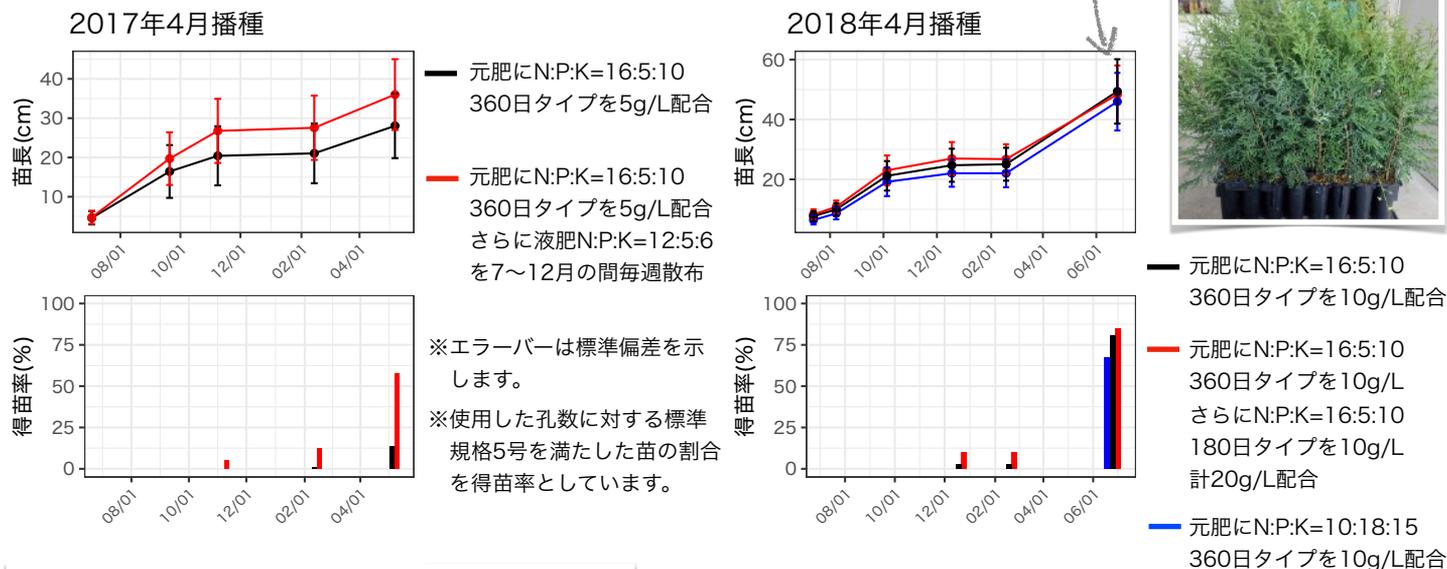
※各図の白抜きのシンボルは平均値、黒線はコンテナ苗の標準規格5号の閾値をそれぞれ示す。

※両図の苗は、3粒/孔播種し、間引きする方法で作られたものです。

## 出荷が可能となる時期

4月に播種した場合、スギでは秋に出荷可能なサイズになりますが、スギと比較してヒノキの成長は遅く、多くの個体は播種翌年の5~6月頃に出荷可能な大きさになります。

(コンテナ苗の標準規格5号(苗長30cm以上かつ根元径3.5mm以上)を満たす苗を出荷可能とした場合。)



## どうしても1成長期で苗を作りたい場合

分離型コンテナを活用し、密度調整とソート(選苗)をすることで、各個体の成長を促すことができます。これにより、4月に播種して、翌春に出荷可能な苗を作ることができます。

### 育苗条件

2020/4/20に1粒/孔播種

元肥 N:P:K=16:5:10-360日タイプを10g/L

追肥 なし

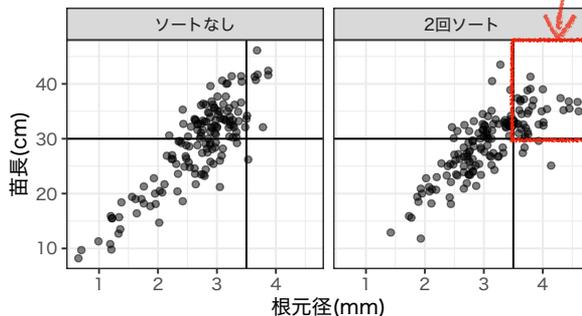
ソートは8月と9月、計2回行う

ソートでは苗長を基準として区分する(下表参照)

ソート区分ごとに育苗密度を変える(下表参照)

ソート区分	苗長(cm)	育苗密度(本/m <sup>2</sup> )
S	~10	400
M	10~15	200
L	15~20	100
LL	20~	50

### 2020年4月播種、翌年2月時点



出荷可能

※残りの苗は、5~6月頃に十分な大きさになっていきます。

### 播種翌年2月



今後、播種後1成長期で高い得苗率が得られるよう、育苗条件などを検討していく予定です。

## 失敗例

育苗期間の短縮に関しては、冬に加温環境下で播種し、発芽させておき、春にコンテナへ移植する方法が有効と考えられますが、環境の変化が大きすぎたのか、コンテナへ移植した多くの個体は枯れてしまいました。順化の方法など、検討が必要です。

2019/3/1



移植後

